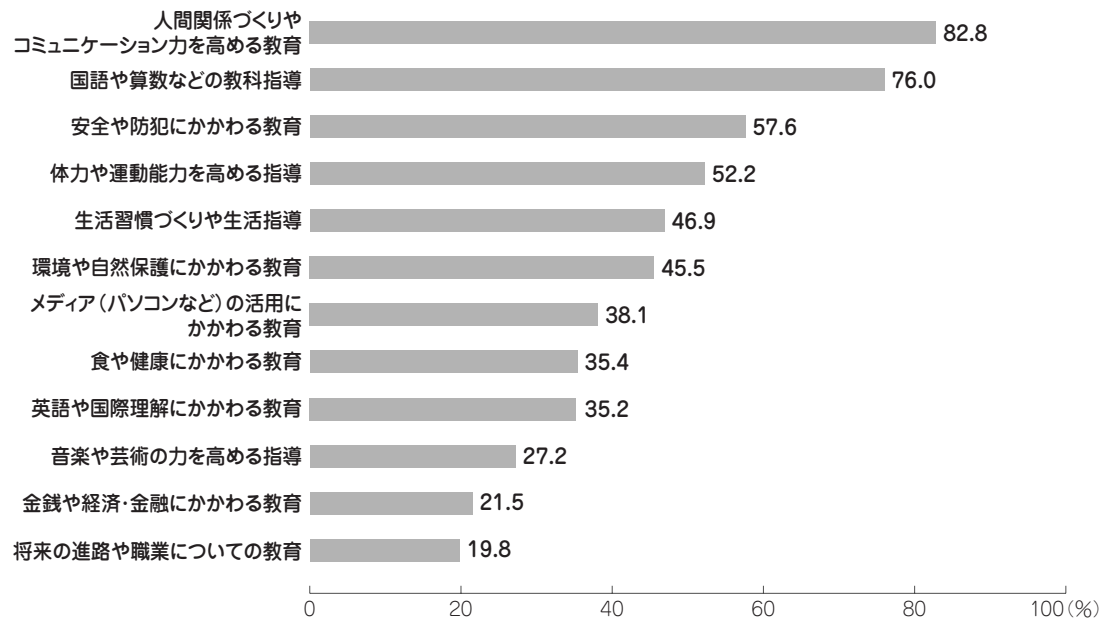


1. 学校に重視してほしい指導や教育

学校教育としてどのような指導や教育を重視してほしいかをたずねたところ、8割前後の保護者が、「人間関係づくりやコミュニケーション力を高める教育」「国語や算数などの教科指導」をあげている。

Q あなたが、学校に重視してほしいと思う指導や教育は何ですか。今後、重視してほしいと思うものを、すべて選んでください。

図3-1-1 学校に重視してほしい指導や教育 (n=4,718)



*複数回答。

保護者は、小学校でどのような教育を行ってほしいと考えているのだろうか。本章では、英語以外も含めた保護者の教育観との関係から、英語の位置づけをみていきたい。

はじめに、学校教育の理念や方針として、どのようなことを重視すべきと考えているかをみてみたい。学校に重視してほしい指導や教育を、12項目の中から複数回答でたずねた結果が図3-1-1である。なお、項目の平均選択数は5.4項目だった。

もっとも選択された割合が高かったのは「人間関係づくりやコミュニケーション力を高める教育」で82.8%、次いで「国語や算数などの教科指導」が76.0%だった。また、保護者の世情への不安を反映してか、「安全や防犯にかかわる教育」が57.6%の第3位であった。

一方、もっとも選択された割合が低かったのは「将来の進路や職業についての教育」で19.8%、次いで「金銭や経済・金融にかかわる教育」が21.5%だった。「英語や国際理解にかかわる教育」は35.2%で下から4番目の第9位だった。

こうしてみると、保護者は、従来から学校教育の中心である基礎的な力を育む教育や指導を第一に重視していることがわかる。

表3-1-1 学校に重視してほしい指導や教育(地域別/母親の学歴別)

	地域別			母親の学歴別	
	大都市 (n=1,713)	中都市 (n=1,360)	郡部 (n=1,645)	18歳以下卒 (n=2,037)	20歳以上卒 (n=1,901)
人間関係づくりやコミュニケーション力を高める教育	85.2	82.7	80.3	83.4	84.0
国語や算数などの教科指導	78.2	77.2	72.7	75.6	77.1
安全や防犯にかかわる教育	60.0	57.2	55.5	58.9	58.1
体力や運動能力を高める指導	58.6	> 50.1	47.2	50.0	53.9
生活習慣づくりや生活指導	46.9	49.1	45.0	46.6	45.8
環境や自然保護にかかわる教育	51.5	> 43.2	41.2	41.9	< 50.7
メディア(パソコンなど)の活用にかかわる教育	32.1	36.6	< 45.6	45.1	>> 31.9
食や健康にかかわる教育	36.6	34.0	35.2	32.3	< 39.9
英語や国際理解にかかわる教育	44.0	>> 33.1	> 27.7	30.9	<< 42.3
音楽や芸術の力を高める指導	35.8	>> 23.7	21.1	21.5	<< 33.0
金銭や経済・金融にかかわる教育	22.7	20.0	21.6	21.3	22.0
将来の進路や職業についての教育	21.9	17.6	19.3	19.1	20.8

(%)

*複数回答。

*<>は5ポイント以上の差があったもの。<<>は10ポイント以上の差があったもの。

*「母親の学歴別」は、母親の回答のみ分析。「あなたが最後に学校を卒業したのは、だいたい何歳のときでしたか」の設問に、「15歳」「18歳」と回答した場合は「18歳以下卒」、「20歳」「22歳」「24歳以上」と回答した場合は「20歳以上卒」とした。

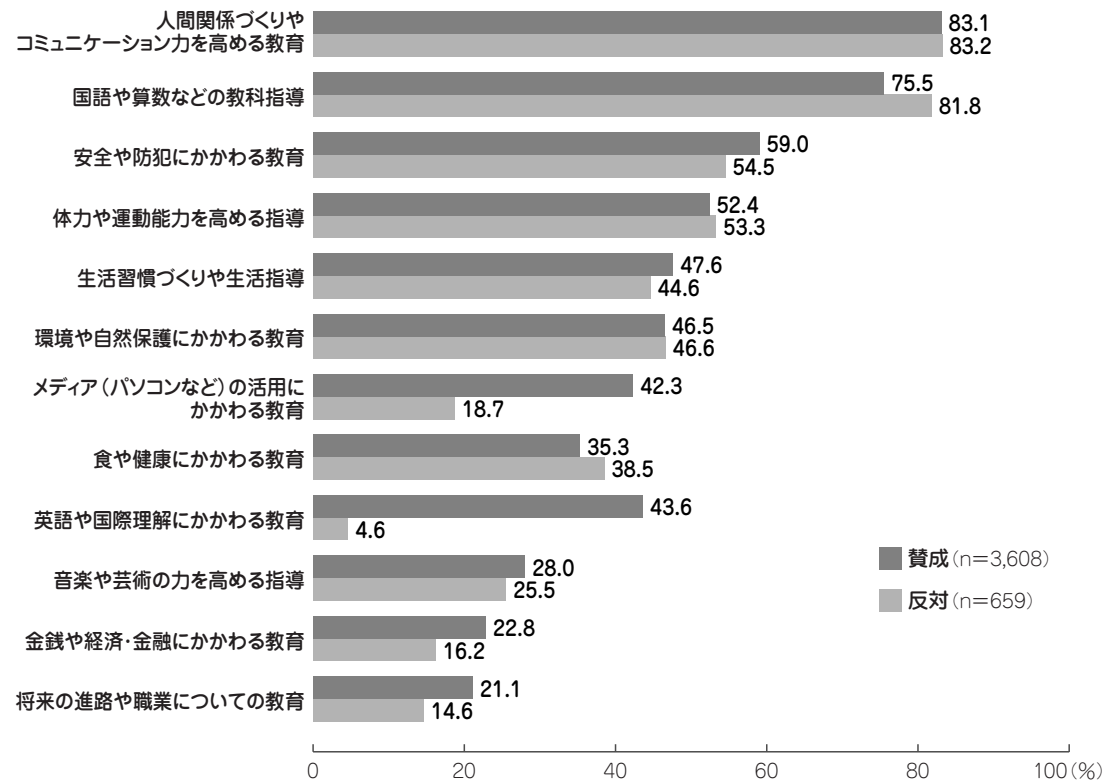
次に、学校に重視してほしい指導や教育について、地域や母親の学歴による違いをみてみよう(表3-1-1)。

はじめに、地域別にみると、「人間関係づくりやコミュニケーション力を高める教育」や「国語や算数などの教科指導」といった上位の項目ではあまり差がみられない。それに対して、「体力や運動能力を高める指導」「環境や自然保護にかかわる教育」「英語や国際理解にかかわる教育」「音楽や芸術の力を高める指導」は、大都市の保護者の方が、他の地域に比べて選択している割合が高い。反対に、「メディア(パソコンなど)の活用にかかわる教育」は、郡部の保護者の方が選択した割合が高く、地域による違いがみられる。

次に、母親の学歴別にみたところ、「人間関係づくりやコミュニケーション力を高める教育」や「国語や算数などの教科指導」といった項目ではほとんど差がみられない。それに対して、「英語や国際理解にかかわる教育」「音楽や芸術の力を高める指導」については、「20歳以上卒」の母親の方が10ポイント以上も高い。これとは反対に、「メディアの活用にかかわる教育」は、「18歳以下卒」の母親の方が10ポイント以上も高い。

人間関係づくりやコミュニケーション力、あるいは国語や算数といった基礎的な力の教育は、学歴を問わずほとんどの保護者が重視している一方、その他の教育や指導では学歴による違いがみられる。

図3-1-2 学校に重視してほしい指導や教育
(小学校英語の必修化の賛否別)

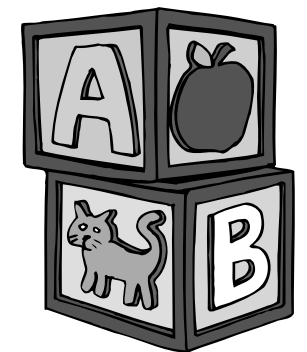


*複数回答。

*「賛成」は、「小学校で英語教育を必修にすることについて、賛成ですか、反対ですか」の設問で「賛成」「どちらかといえば賛成」と回答した場合。「反対」は、「反対」「どちらかといえば反対」と回答した場合。

小学校英語の必修化の賛否別に、今後、学校に重視してほしい指導や教育の違いをみた(図3-1-2)。賛否で大きな差があるものをみると、必修化に「賛成」の保護者は、43.6%が「英語や国際理解にかかわる教育」をあげているのに対し、「反対」の保護者は4.6%のみだった。また、「メディアの活用にかかわる教育」についても、小学校英語の必修化に「賛成」の保護者では42.3%があげている一方、「反対」の保護者は18.7%と、20ポイント以上の差がみられた。

一方、差は6.3ポイントとそれほど大きくはないものの、「国語や算数などの教科指導」については、小学校英語の必修化に「賛成」の保護者より「反対」の保護者の方が選択している割合は高かった(「賛成」75.5%<「反対」81.8%)。

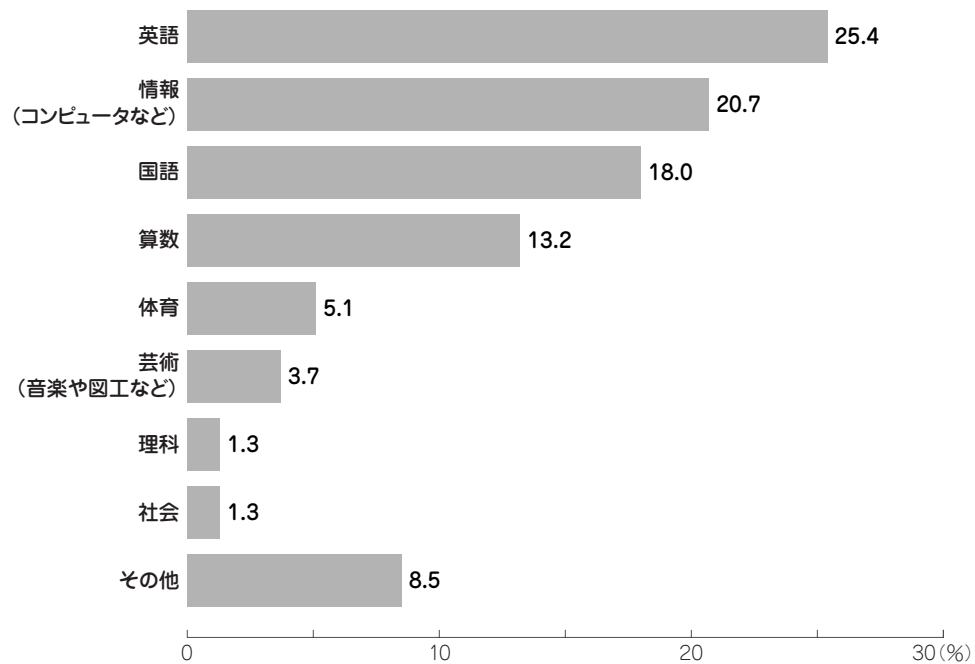


2. 増やしてほしい授業時間

もし週に1時間だけ授業の時間が増やせるなら、どの時間がよいかをたずねたところ、「英語」が第1位で25.4%の保護者が選択した。第2位は「情報」で20.7%だった。また、「英語」は都市部の方が、「情報」は郡部の方が選択される割合が高い。

Q もし週に1時間だけ、授業の時間が増やせるとしたら、あなたはどの時間を増やしてほしいと思いますか。

図3-2-1 増やしてほしい授業時間 (n=4,718)

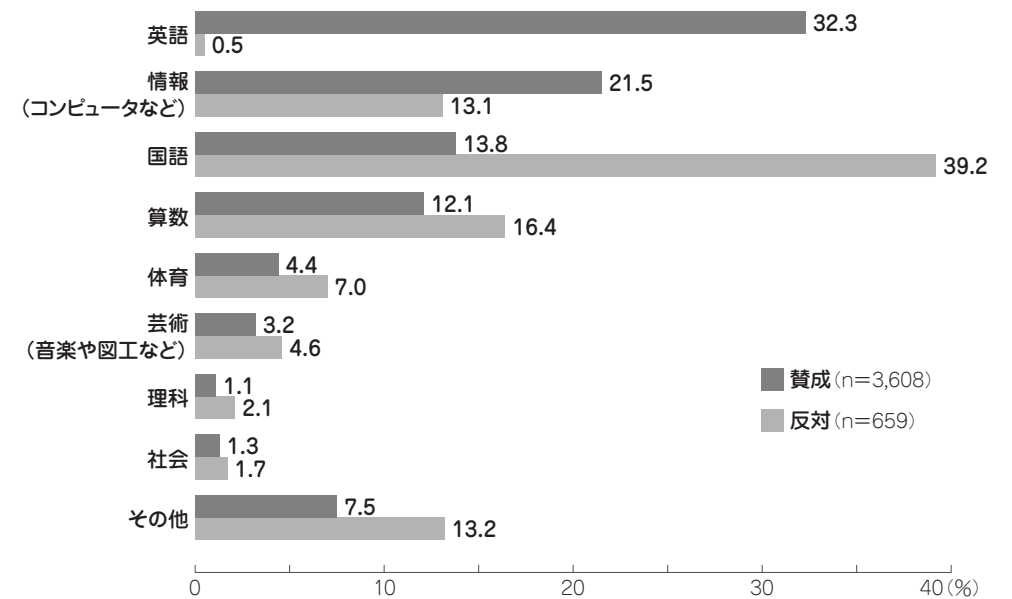


*「無答不明」は図から省略した。

もし週に1時間だけ、授業の時間が増やせるとしたら、どの時間を増やしてほしいかをたずねた(図3-2-1)。その結果、もっとも多かったのは「英語」で、4人に1人(25.4%)の保護者が選択していた。次に多かったのは「情報(コンピュータなど)」の20.7%だった。以下、「国語」が18.0%、「算数」が13.2%で続く。なお、「その他」が8.5%あったが、その自由記述の内容をみると、「道徳」という回答が多かった。

前節で、学校に重視してほしい指導や教育について複数回答でたずねた結果では、人間関係づくりや基礎的な教科指導を望む声が多かった。そこでは、学校教育全体での理念や方針としての重要性をたずねていたのに対し、「週にあと1時間だけ増やせるなら」という観点になると、保護者は各授業を同列に考えるのではなく、現在の実施時数やカリキュラム上の位置づけなども加味した上で、もう少しはやってほしい、といった意味も含めて選択しているものと思われる。現在、「英語」や「情報」の授業が行われる場合には、「総合的な学習の時間」の中であることが多いが、こうした現状も背景にあるだろう。また、子どもにはいろいろな体験をさせたい、あるいは技能をつけさせたいといった保護者の思いも反映されていると考えられる。

図3-2-2 増やしてほしい授業時間 (小学校英語の必修化の賛否別)

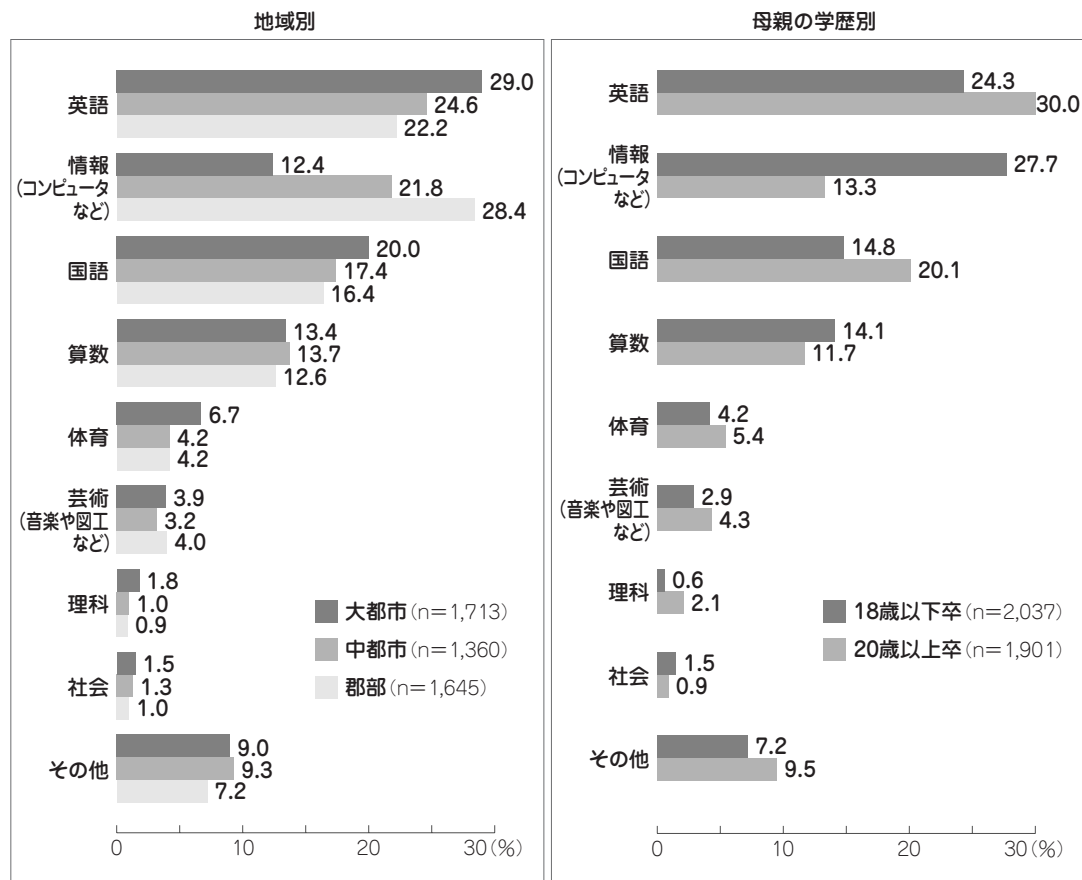


*「賛成」は、「小学校で英語教育を必修にすることについて、賛成ですか、反対ですか」の設問で「賛成」「どちらかといえば賛成」と回答した場合。「反対」は、「反対」「どちらかといえば反対」と回答した場合。

*「無答不明」は図から省略した。

小学校英語の必修化に対する賛否別に、増やしてほしい授業時間の違いをみた(図3-2-2)。その結果、必修化に「賛成」の保護者だと、「英語」が32.3%でもっとも多く、次いで「情報」が21.5%で続く。これに対して、必修化に「反対」の保護者だと、「国語」が39.2%で圧倒的に多く、次いで「算数」が16.4%で続いている。「反対」の保護者が、「英語」を選択していないことは当然であるとはしても、特に増やしてほしい授業時間としては、「国語」を考えていることがわかる。

図3-2-3 増やしてほしい授業時間(地域別/母親の学歴別)

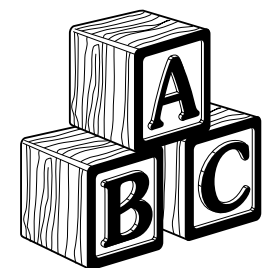


*「母親の学歴別」は、母親の回答のみ分析。「あなたが最後に学校を卒業したのは、だいたい何歳のときでしたか」の設問に、「15歳」「18歳」と回答した場合は「18歳以下卒」、「20歳」「22歳」「24歳以上」と回答した場合は「20歳以上卒」とした。
 *「無答不明」は図から省略した。

増やしてほしい授業時間について、地域別と母親の学歴別にみたものが図3-2-3である。地域別では、「英語」と「情報」で特徴がみられる。「英語」は、大都市29.0%、中都市24.6%、郡部22.2%となっており、都市部の方が増やしてほしいと考えている保護者がやや多い傾向にある。一方、「情報」は、大都市で12.4%、中都市で21.8%、郡部で28.4%となっており、郡部の方が顕著に多くなっている。

母親の学歴別では、「英語」「情報」「国語」で違いがみられた。「英語」と「国語」については、「20歳以上卒」の母親が選択している割合が高いのに対し、「情報」は「18歳以下卒」の母親が選択している割合が高い。

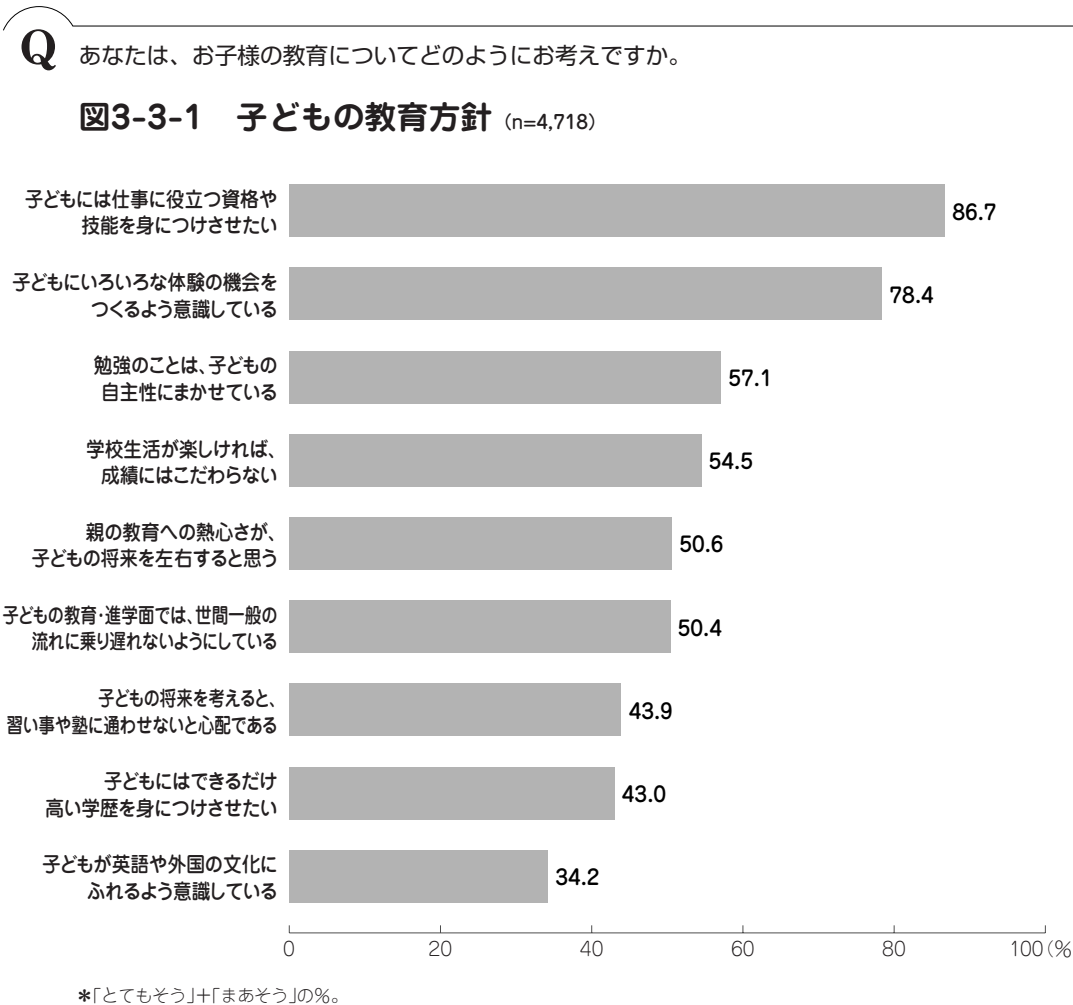
こうしてみると、「英語」は、大都市や「20歳以上卒」の母親が選ぶ割合が高いのに対し、「情報」は、郡部や「18歳以下卒」の母親が選ぶ割合が高い。どのような授業時間を増やしてほしいと思っているかは対照的である。



3. 子どもの教育方針

86.7%の保護者が「子どもには仕事に役立つ資格や技能を身につけさせたい」、78.4%が「子どもにいろいろな体験の機会をつくるよう意識している」と回答している。一方、「子どもが英語や外国の文化にふれるよう意識している」のは34.2%だった。こうした教育方針については、地域や母親の学歴によって違いがみられる。

表3-3-1 子どもの教育方針(地域別/母親の学歴別)



保護者は子どもの教育に関してどのような考えをもっているのだろうか。「子どもには仕事に役立つ資格や技能を身につけさせたい」に「そう(とても+まあ、以下同様)」と回答した保護者が86.7%でもっとも多く、「子どもにいろいろな体験の機会をつくるよう意識している」が78.4%で続いている。将来、子どもが困らないように、資格や技能を身につけさせたいと考えるとともに、いろいろな体験を通じて子どもの可能性を広げたい、といった保護者の思いがみえてくる。

一方、「子どもが英語や外国の文化にふれるよう意識している」という英語に関連する項目に、「そう」という回答をしたのは34.2%にとどまった(図3-3-1)。日ごろから英語や外国の文化を意識して子育てをしている保護者は、それほど多くはないようだ。

	地域別			母親の学歴別	
	大都市 (n=1,713)	中都市 (n=1,360)	郡部 (n=1,645)	18歳以下卒 (n=2,037)	20歳以上卒 (n=1,901)
子どもには仕事に役立つ資格や技能を身につけさせたい	84.0	88.5	88.1	89.5	86.1
子どもにいろいろな体験の機会をつくるよう意識している	84.7	> 75.0	74.5	71.3	<< 86.4
勉強のことは、子どもの自主性にまかせている	50.2	< 58.9	62.8	61.4	> 52.4
学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない	49.6	< 55.8	58.4	58.8	>> 47.8
親の教育への熱心さが、子どもの将来を左右すると思う	56.9	> 49.5	44.9	45.2	<< 57.0
子どもの教育・進学面では、世間一般の流れに乗り遅れないようにしている	50.9	51.6	48.7	49.3	52.0
子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと心配である	57.1	>> 43.4	>> 30.6	39.7	<< 50.7
子どもにはできるだけ高い学歴を身につけさせたい	51.2	> 43.0	> 34.5	34.4	<< 52.4
子どもが英語や外国の文化にふれるよう意識している	46.1	>> 30.6	> 24.9	25.1	<< 44.7

(%)

*「とてもそう」+「まあそう」の%。
 *「>」は5ポイント以上の差があったもの。「<>」は10ポイント以上の差があったもの。
 *「母親の学歴別」は、母親の回答のみ分析。「あなたが最後に学校を卒業したのは、だいたい何歳のときでしたか」の設問に、「15歳」「18歳」と回答した場合は「18歳以下卒」、「20歳」「22歳」「24歳以上」と回答した場合は「20歳以上卒」とした。

子どもの教育についての考えは、保護者によってどのように異なるのだろうか。教育方針についての違いを、地域別ならびに母親の学歴別にみた(表3-3-1)。

地域別にみると、「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと心配である」「子どもにはできるだけ高い学歴を身につけさせたい」「子どもが英語や外国の文化にふれるよう意識している」などでは、都市部ほど「そう」と回答する保護者が多い。これとは反対の傾向として、「勉強のことは、子どもの自主性にまかせている」「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」に「そう」と回答した保護者の割合は大都市で少ない。

母親の学歴別では、「20歳以上卒」の母親は「子どもにいろいろな体験の機会をつくるよう意識している」など、「そう」と回答した割合が相対的に高い項目が多い。これに対して、「18歳以下卒」の母親は、「勉強のことは、子どもの自主性にまかせている」「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」といった回答の割合が相対的に高い。これらから、「20歳以上卒」の母親が教育熱心な様子が見えてくる。

このような違いがみられる一方、「子どもには仕事に役立つ資格や技能を身につけさせたい」「子どもの教育・進学面では、世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」といった項目では、地域や母親の学歴による違いはみられなかった。

4. 英語教育に関する意識

87.1%の保護者が「今後の国際環境を考えると、英語が話せるようになることは必要だ」と考え、75.0%の保護者が「英語はできるだけ早い時期から学ぶのがよい」と考えている。また、教員もほぼ同様の傾向であり、英語の必要性を感じているという意識は、保護者も教員も共通している。

Q 英語教育について、次のような意見がありますが、あなたはどのように考えますか。

図3-4-1 英語教育に関する意識 (n=4,718)

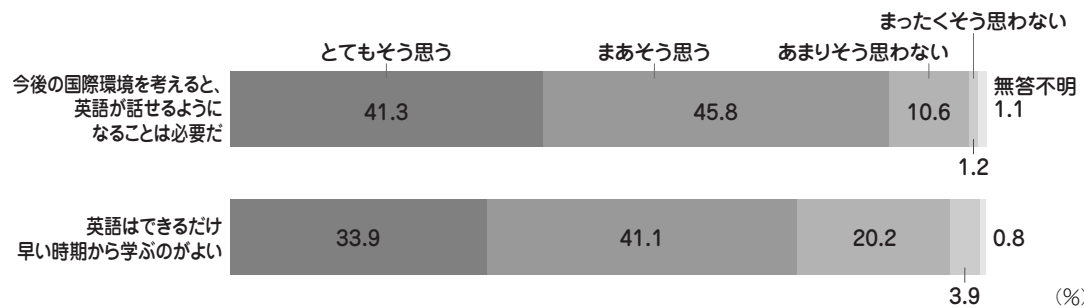
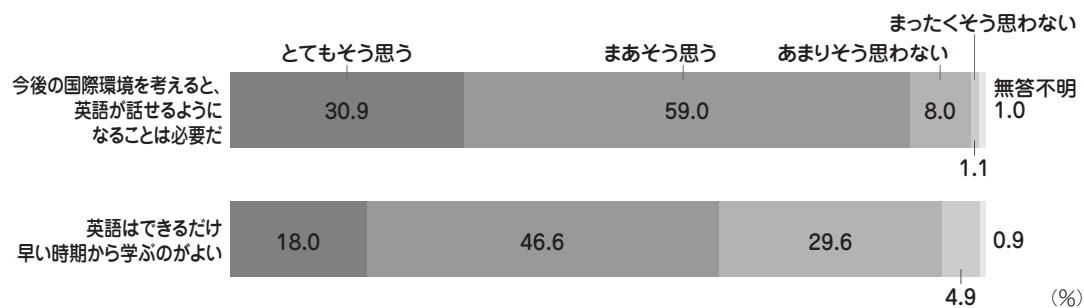


図3-4-2 英語教育に関する意識(教員調査) (n=3,503)



*[第1回小学校英語に関する基本調査(教員調査)報告書]より。
英語教育に関する意識についてたずねた設問で、保護者調査と同じ2項目のみ図示した。

英語の必要性や英語教育の開始時期について、保護者がどのような意識をもっているのかをたずねた。これらの内容については、先に行った教員調査でも同一の項目でたずねているので、対比させてみよう。

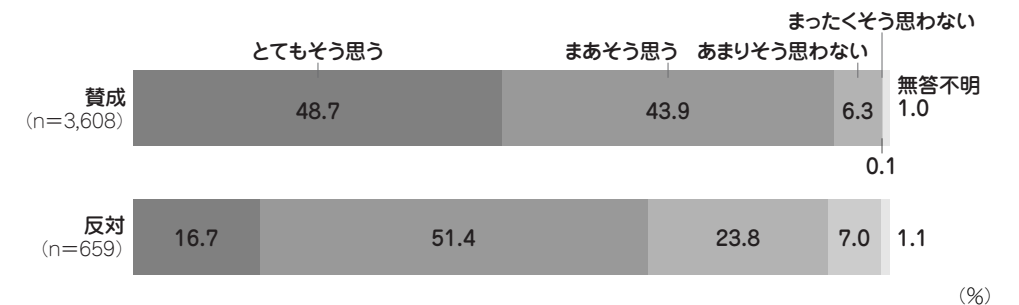
保護者の意識をみると、「今後の国際環境を考えると、英語が話せるようになることは必要だ」と87.1%の保護者が「そう思う(とても+まあ、以下同様)」と考えており、75.0%の保護者が「英語はできるだけ早い時期から学ぶのがよい」と考えている(図3-4-1)。多くの保護者が英語の必要性を感じているようだ。

次に、教員調査の結果をみてみよう。「今後の国際環境を考えると、英語が話せるようになることは必要だ」では89.9%、「英語はできるだけ早い時期から学ぶのがよい」では64.6%の教員が「そう思う」と回答していた(図3-4-2)。

このような結果を対比させてみると、保護者も教員も英語の必要性を感じているという意識は共通しているようだ。

図3-4-3 英語教育に関する意識①

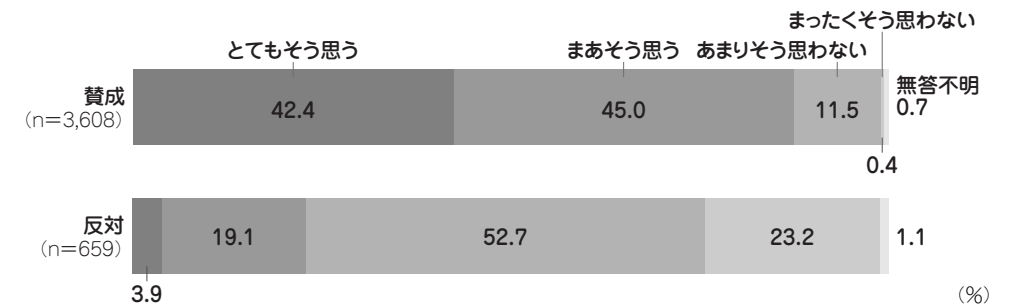
(「今後の国際環境を考えると、英語が話せるようになることは必要だ」)
(小学校英語の必修化の賛否別)



*「賛成」は、「小学校で英語教育を必修にすることについて、賛成ですか、反対ですか」の設問で「賛成」「どちらかといえば賛成」と回答した場合。「反対」は、「反対」「どちらかといえば反対」と回答した場合。

図3-4-4 英語教育に関する意識②

(「英語はできるだけ早い時期から学ぶのがよい」)
(小学校英語の必修化の賛否別)



*「賛成」は、「小学校で英語教育を必修にすることについて、賛成ですか、反対ですか」の設問で「賛成」「どちらかといえば賛成」と回答した場合。「反対」は、「反対」「どちらかといえば反対」と回答した場合。

次に、小学校英語の必修化の賛否別に、英語教育に関する意識をみた。まず、「今後の国際環境を考えると、英語が話せるようになることは必要だ」について「そう思う」と回答した保護者の割合は、必修化に「賛成」の保護者で92.6%、「反対」の保護者で68.1%となっている(図3-4-3)。「賛成」の保護者の方が圧倒的に高いものの、「反対」の保護者も7割近くが必要性自体は感じていることがわかる。

「英語はできるだけ早い時期から学ぶのがよい」について、「そう思う」と回答した保護者の割合は、必修化に「賛成」の保護者では87.4%にもものぼる。これに対して、「反対」の保護者だと23.0%にとどまる(図3-4-4)。英語をいつから学びはじめるかという意識においては、必修化への賛否で大きな差が出ていることがわかる。

5. 子どもに期待する英語力

45.1%の保護者が、子どもには「日常会話で困らない程度の英語力」を望んでいる。特に都市部や、子どもに大卒以上の進学を望む保護者の場合は、より高い英語力を期待している。一方で、「今、楽しく取り組めれば、とくに役に立たなくてもよい」という保護者も21.7%いる。

Q お子様を英語を学ぶ際、どのレベルの英語力を身につけてほしいと思いますか。

図3-5-1 子どもに期待する英語力 (n=4,718)

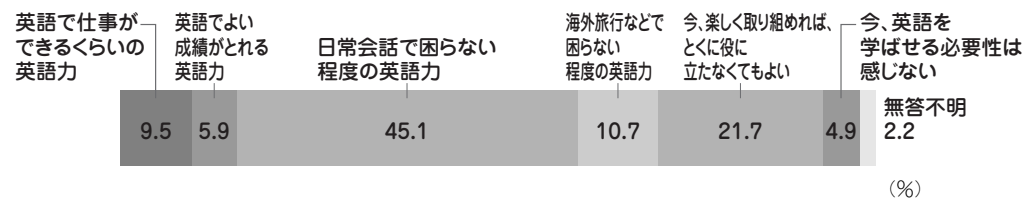


表3-5-1 子どもに期待する英語力(地域別/子どもへの進学期待別)

	地域別			子どもへの進学期待別	
	大都市 (n=1,713)	中都市 (n=1,360)	郡部 (n=1,645)	短大卒以下希望 (n=2,029)	大卒以上希望 (n=2,246)
英語で仕事ができるくらいの英語力	13.3	7.9	6.9	5.5	13.6
英語でよい成績がとれる英語力	4.0	6.8	7.2	6.6	5.9
日常会話で困らない程度の英語力	48.2	45.8	41.2	43.0	48.3
海外旅行などで困らない程度の英語力	10.7	10.3	10.9	11.8	9.7
今、楽しく取り組めれば、とくに役に立たなくてもよい	17.1	22.1	26.1	26.3	16.4
今、英語を学ばせる必要性は感じない	4.1	5.1	5.5	4.7	4.1
無答不明	2.5	1.9	2.2	2.1	2.0

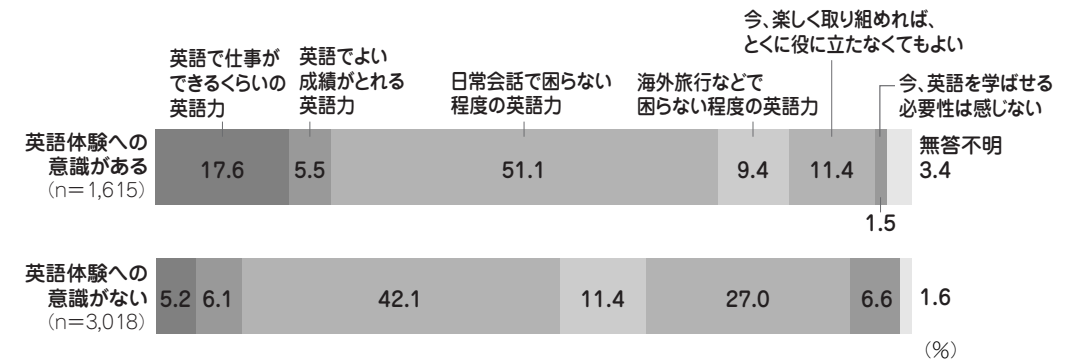
*<>は5ポイント以上の差があったもの。
*「短大卒以下希望」は、「お子様をどこまでの学校へ進学させたいとお考えですか」の設問で、「中学校まで」「高校まで」「専門学校・各種学校まで」「短期大学まで」と回答した場合。「大卒以上希望」は、「四年制大学まで」「大学院まで」と回答した場合。

保護者が子どもに期待する英語力のレベルをたずねたところ、45.1%の保護者が「日常会話で困らない程度の英語力」と回答した(図3-5-1)。一方で、21.7%の保護者が「今、楽しく取り組めれば、とくに役に立たなくてもよい」と答えており、子どもに期待する英語力は保護者の間でばらつきがあることがわかる。それでは、保護者の考え方の違いに関係する要因は何なのだろうか。他の調査項目との関係について詳しくみたところ、地域や子どもへの進学期待によって、子どもの英語力への期待に違いがみられた(表3-5-1)。

地域別にみた場合、大都市では「英語で仕事ができるくらいの英語力」「日常会話で困らない程度の英語力」など高い英語力を期待する項目で、中都市・郡部よりも割合が高い。一方で、中都市・郡部では「今、楽しく取り組めれば、とくに役に立たなくてもよい」という項目で、大都市よりも割合が高い。

また、子どもへの進学期待別にみたところ、「大卒以上希望」と回答した保護者の方が、「短大卒以下希望」と回答した場合よりも、子どもに対して高い英語力を期待している。

図3-5-2 子どもに期待する英語力(英語体験への意識の有無別)



*「英語体験への意識がある」は、「お子様の教育についてどのようにお考えですか」の設問で、「子どもが英語や外国の文化にふれるよう意識している」に、「とてもそう」「まあそう」と回答した場合。「英語体験への意識がない」は、「あまりそうでない」「まったくそうでない」と回答した場合。

次に、保護者に対して「子どもが英語や外国の文化にふれるよう意識している」かをたずねた項目の回答別に、子どもに期待する英語力の違いをみてみた(図3-5-2)。英語体験をさせようという意識をもっている場合は、「英語で仕事ができるくらいの英語力」「日常会話で困らない程度の英語力」という高い英語力を期待する割合が合わせて約7割である。一方で、英語体験をさせようという意識をもっていない場合はその割合が半数以下となり、「今、楽しく取り組めれば、とくに役に立たなくてもよい」「今、英語を学ばせる必要性は感じない」が合わせて全体のおよそ三分の一を占める。前節でみたように、「今後の国際環境を考えると、英語が話せるようになることは必要だ」という項目に対しては、約9割の保護者が「そう思う(とても+まあ)」と答えているが、実際に保護者が子どもに期待する英語力のレベルを詳しくみていくと、地域や保護者の子どもに対する進学期待、保護者の教育観などによって異なっているようである。

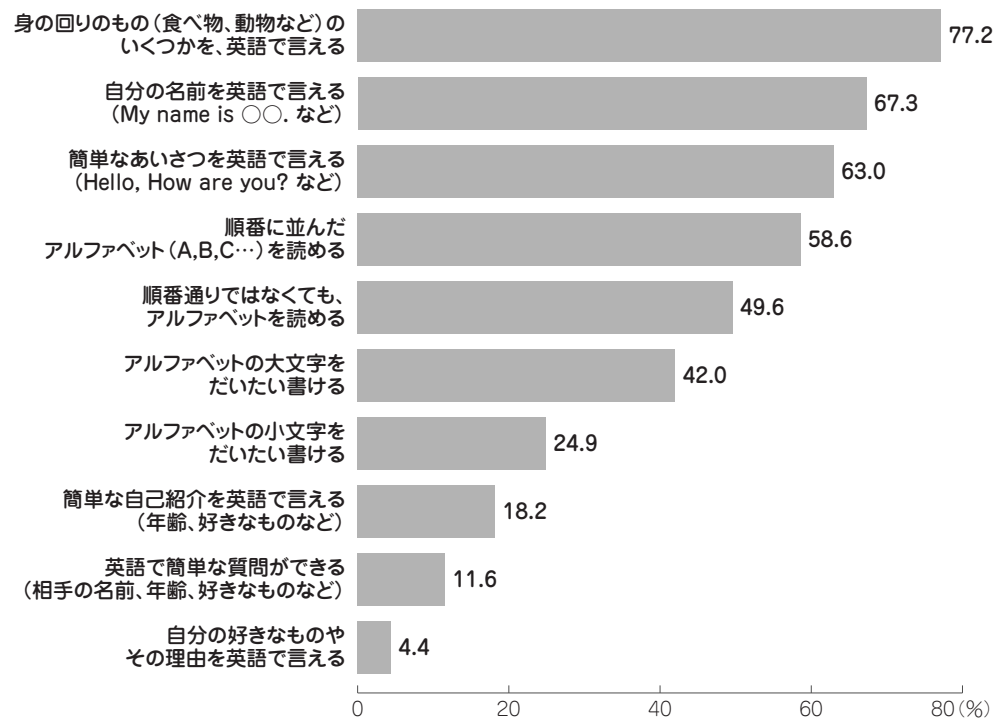
6. 子どもの英語力

保護者の回答によれば、半数以上の小学生が自分の名前やあいさつなどの簡単なことは英語で言えるが、アルファベットの文字を書くことについては学年差がある。また、学校外での英語学習の有無や地域、母親の学歴によって、子どもの英語力に違いがみられた。

図3-6-2 子どもの英語力(学年別)

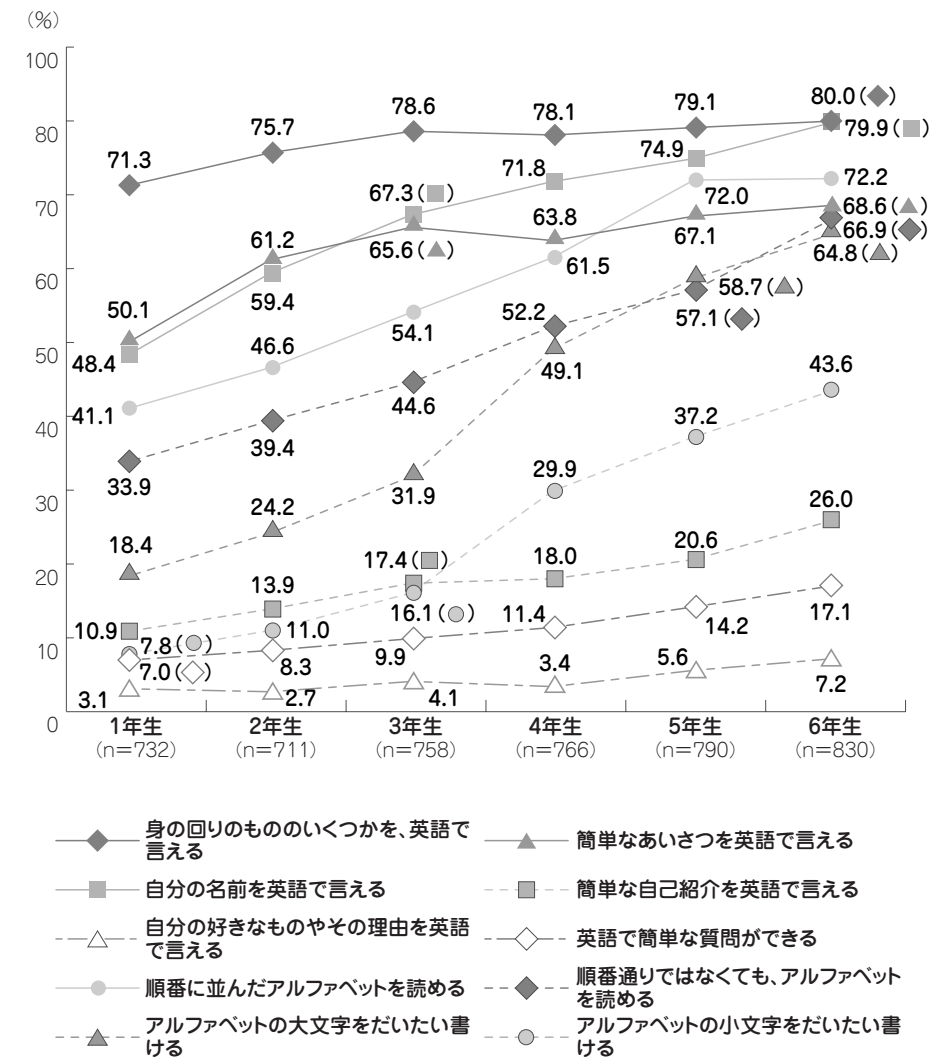
Q お子様は英語を使って次のようなことができますか。

図3-6-1 子どもの英語力 (n=4,718)



*複数回答。

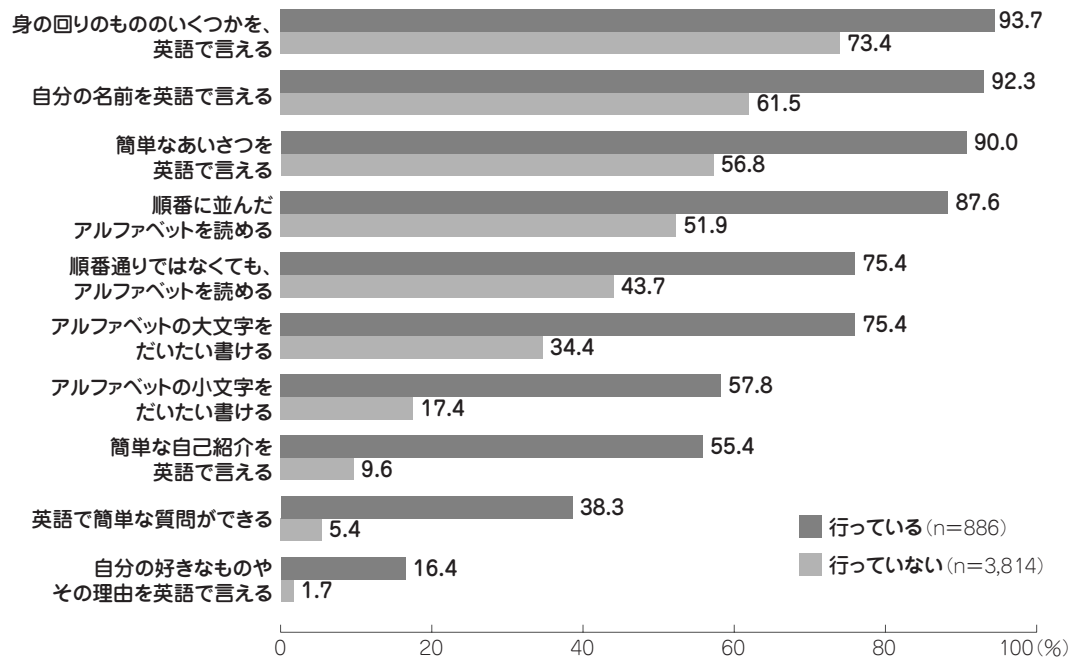
保護者に対して、子どもが英語のできることをたずねたところ、半数以上が「身の回りのもののいくつか」「自分の名前」「簡単なあいさつ」を「英語で言える」と回答している(図3-6-1)。また、「順番に並んだアルファベットを読める」についても6割程度が「読める」と回答している。だが、「アルファベットの大文字をだいたい書ける」だと約40%、「アルファベットの小文字をだいたい書ける」だと約25%程度である。



*複数回答。

次に、子どもの英語力について学年別に詳しくみると、「英語で言える」ことなどについては、学年による大きな違いはみられないが、アルファベットを書くこと(大文字・小文字)に関しては4年生を境にできる割合が増える(図3-6-2)。これは、4年生の国語でローマ字を学習することも影響しているものと思われるが、5年生以降も学年を追って「だいたい書ける」割合は増え、6年生では約6割が大文字を、約4割が小文字を書ける状況となる。高学年になると「学習塾の英語コース」など、学校外での英語学習を行っている割合が高くなるが(第4章第1節②「教育や教材の種類」参照)、その影響があるのかもしれない。

図3-6-3 子どもの英語力(学校外での英語学習の有無別)



*複数回答。
*「現在、お子様は、学校の授業以外で、英語や英会話の学習を行っていますか」の設問で、「行っている」「行っていない」と回答した場合。

表3-6-1 子どもの英語力(地域別/母親の学歴別)

	地域別			母親の学歴別	
	大都市 (n=1,713)	中都市 (n=1,360)	郡部 (n=1,645)	18歳以下卒 (n=2,037)	20歳以上卒 (n=1,901)
身の回りのもののいくつかを、英語で言える	80.4	76.8	74.0	75.9	< 82.3
自分の名前を英語で言える	74.8	> 65.6	61.0	65.8	<< 75.8
簡単なあいさつを英語で言える	70.0	> 62.4	> 56.2	59.7	<< 71.4
順番に並んだアルファベットを読める	62.7	58.4	54.4	56.6	< 63.2
順番通りではなくても、アルファベットを読める	53.4	48.7	46.3	48.4	< 54.6
アルファベットの大文字をだいたい書ける	46.4	> 40.4	38.7	40.3	< 46.3
アルファベットの小文字をだいたい書ける	27.6	24.0	23.0	23.2	< 28.7
簡単な自己紹介を英語で言える	24.6	> 17.1	12.5	14.0	<< 24.4
英語で簡単な質問ができる	16.5	> 10.7	7.2	8.7	< 15.7
自分の好きなものやその理由を英語で言える	6.1	5.0	2.1	3.2	6.0

(%)

*複数回答。
* <>は5ポイント以上の差があったもの。<<>>は10ポイント以上の差があったもの。
*「母親の学歴別」は、母親の回答のみ分析。「あなたが最後に学校を卒業したのは、だいたい何歳のときでしたか」の設問に、「15歳」「18歳」と回答した場合は「18歳以下卒」、「20歳」「22歳」「24歳以上」と回答した場合は「20歳以上卒」とした。

学年以外で子どもの英語力に関係すると考えられる要因をみてみたところ、学校外での英語学習の有無、地域、母親の学歴で違いがみられた。図3-6-3で学校外での英語学習の有無別に子どもの英語力をみると、学校外で英語学習を「行っている」場合の方が、「行っていない」場合よりも子どもの英語力がかなり高いことがわかる。しかし、これは学習経験の違いから当然の結果であるともいえる。

次に、地域別に子どもの英語力をみたところ、大都市の方が中都市・郡部に比べて全般に子どもの英語力が高いことがわかった(表3-6-1)。

さらに、母親の学歴別に子どもの英語力について詳しくみてみたところ、母親が「20歳以上卒」の方が「18歳以下卒」よりも子どもの英語力が高いという傾向がみられた。地域や保護者の属性が、子どもの学校や学校外での英語学習経験に影響し、それが子どもの英語力の違いにつながるのか、今後さらに精査する必要があると思われる。

7. 進学 ①進学期待

およそ半数の保護者が、「四年制大学まで」以上を子どもに期待している。こうした進学期待は、地域や母親の学歴によって大きな違いがみられる。

Q お子様の将来の教育についてうかがいます。あなたはお子様をどこまでの学校へ進学させたいとお考えですか。

図3-7-1 進学期待 (n=4,718)

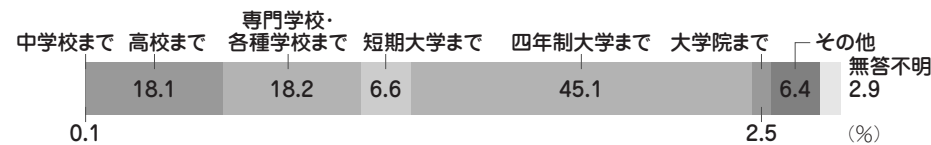


図3-7-2 進学期待 (地域別)

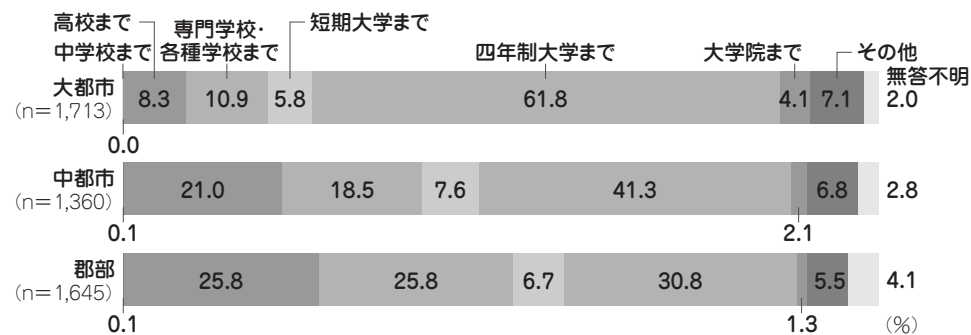
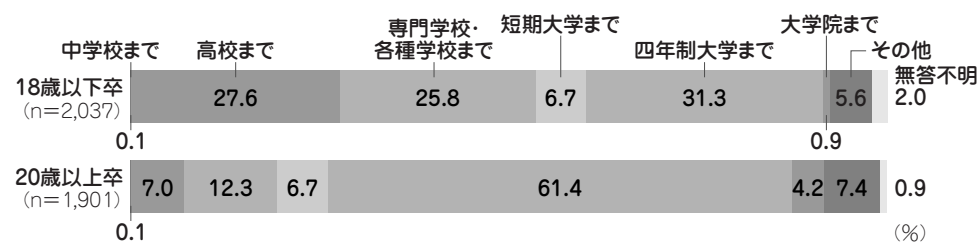


図3-7-3 進学期待 (母親の学歴別)



*「母親の学歴別」は、母親の回答のみ分析。「あなたが最後に学校を卒業したのは、だいたい何歳のときでしたか」の設問に、「15歳」「18歳」と回答した場合は「18歳以下卒」、「20歳」「22歳」「24歳以上」と回答した場合は「20歳以上卒」とした。

保護者は自分の子どもに対して、どの段階の学校まで進んでほしいと思っているのだろうか。全体では、「中学校まで」と「高校まで」を合わせて18.2%、「専門学校・各種学校まで」が18.2%、「短期大学まで」が6.6%で、「四年制大学まで」と「大学院まで」が合わせて47.6%となっている(図3-7-1)。つまり、およそ半数の保護者が「四年制大学まで」以上を子どもに期待している。

地域別にみると、「四年制大学まで」以上を期待する保護者は、大都市では6割を超えるのに対して、郡部だと3割台と大きな差がみられる(図3-7-2)。また、母親の学歴別にみると、「18歳以下卒」の場合には「高校まで」「専門学校・各種学校まで」「四年制大学まで」の割合が、それぞれ3割前後ずつで大差はないのに対し、「20歳以上卒」の場合には約6割の母親が「四年制大学まで」と回答しており、大きな違いがみられた(図3-7-3)。

②中学受験

およそ1割の保護者が、子どもは中学受験を「する」予定だと回答している。中学受験予定は特に大都市に多く、22.1%である。さらに、「まだ決めていない」という回答も28.0%になっている。

Q お子様は、中学受験をする予定ですか。

図3-7-4 中学受験予定の有無 (n=4,718)

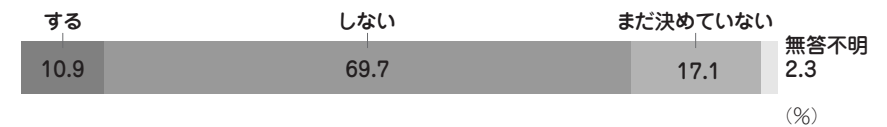


図3-7-5 中学受験予定の有無 (地域別)

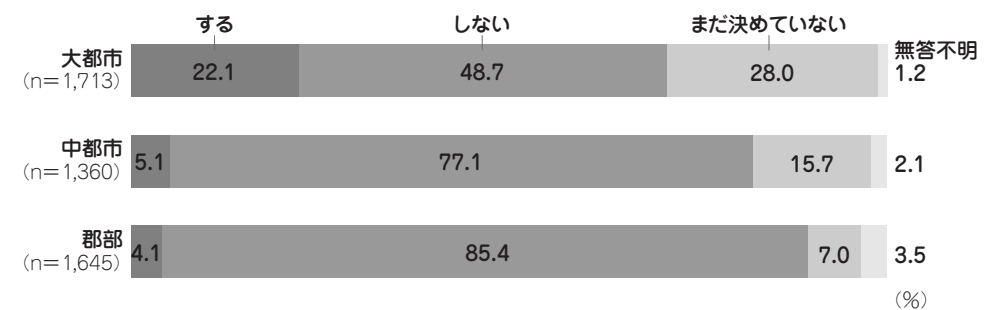
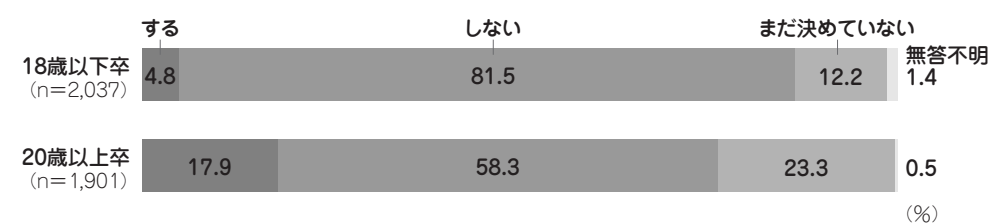


図3-7-6 中学受験予定の有無 (母親の学歴別)



*「母親の学歴別」は、母親の回答のみ分析。「あなたが最後に学校を卒業したのは、だいたい何歳のときでしたか」の設問に、「15歳」「18歳」と回答した場合は「18歳以下卒」、「20歳」「22歳」「24歳以上」と回答した場合は「20歳以上卒」とした。

次に、中学受験予定の有無についてみてみよう。全体では、およそ1割の保護者が、子どもが中学受験を「する」予定があると回答している(図3-7-4)。

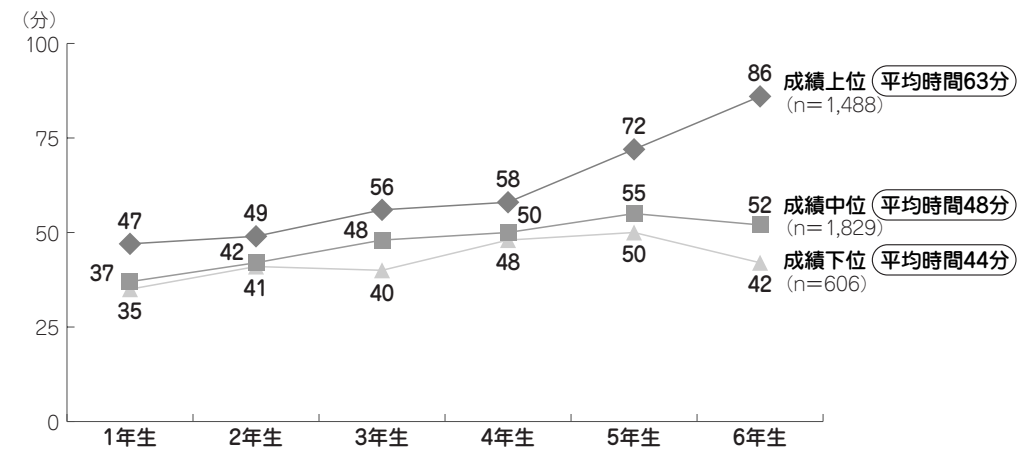
しかし、これについては、地域差が大きい(図3-7-5)。私立の学校が数多く存在している大都市では、22.1%の保護者が、子どもが中学受験を「する」予定だと回答している。さらに、「まだ決めていない」という回答も28.0%にのぼっており、中学受験が検討の俎上に載せられていることがわかる。一方、中都市や郡部では、そもそも大都市に比べて選択肢が少ないことを反映してか、中学受験を「する」との回答は4~5%程度にとどまっている。

また、母親の学歴による違いもみられ、「18歳以下卒」の母親の場合には、「する」との回答は4.8%なのに対し、「20歳以上卒」の母親だと17.9%にのぼっており、家庭環境の影響がみられる(図3-7-6)。

8. 子どもの学習

保護者に子どもの学習についてたずねたところ、家庭学習時間の平均は52分だった。学習時間は学年があがるにつれて少しずつ増加する。また、高学年になると、成績上位層と中・下位層との学習時間差が顕著になる。

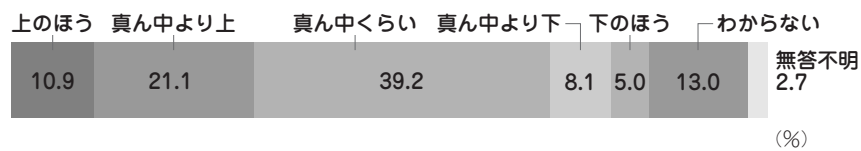
図3-8-4 平日の平均学習時間(塾などで勉強する時間も含む)
(成績別/学年別)



*平均時間は、「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「それ以上」を240分、のように置き換えて、「無答不明」を除いて算出した。
*「成績上位」は、「上のほう」「真ん中より上」、「成績中位」は、「真ん中くらい」、「成績下位」は、「真ん中より下」「下のほう」と回答した場合。
*各学年のサンプル数は、1年生(成績上位149人、中位239人、下位72人)、2年生(成績上位223人、中位287人、下位84人)、3年生(成績上位237人、中位317人、下位86人)、4年生(成績上位276人、中位296人、下位112人)、5年生(成績上位281人、中位320人、下位100人)、6年生(成績上位289人、中位323人、下位130人)。

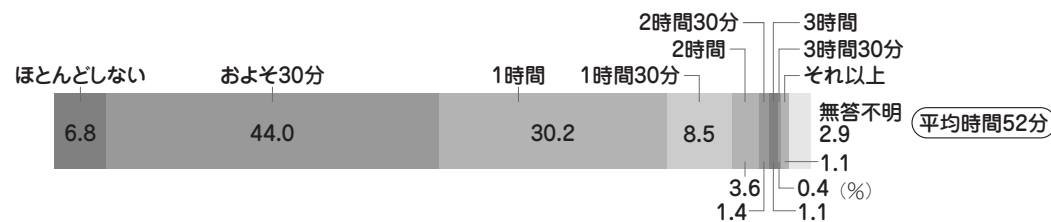
Q お子様の学校での成績は、クラスの中でどのくらいですか。

図3-8-1 子どもの成績 (n=4,718)



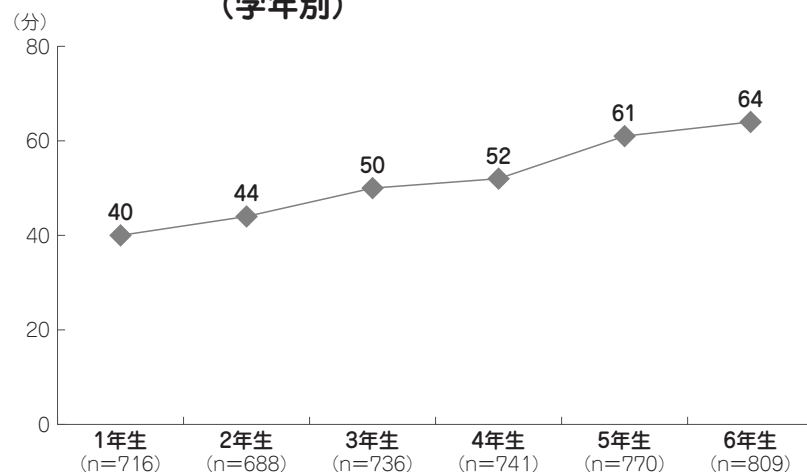
Q お子様はふだん(月曜日～金曜日)、1日に平均してご家庭でどのくらい勉強しますか。学習塾などで勉強する時間を含めてお答えください。

図3-8-2 平日の学習時間(塾などで勉強する時間も含む) (n=4,718)



*平均時間は、「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「それ以上」を240分、のように置き換えて、「無答不明」を除いて算出した(平均時間算出の母数は4,581人)。

図3-8-3 平日の平均学習時間(塾などで勉強する時間も含む)
(学年別)



*平均時間は、「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「それ以上」を240分、のように置き換えて、「無答不明」を除いて算出した。

ここでは、子どもの学習についてみてみよう。ただし、ここでの結果は、保護者の回答にもとづくものであるため、子どもの学習の実態そのものではなく、保護者の目を通した子どもの姿である。こうした点に留意した上で、子どもの学校での成績や、塾や家庭などの学校以外の場での学習時間についてみていこう。

はじめに、子どもの成績である(図3-8-1)。「真ん中くらい」という回答がもっとも多く39.2%を占める。また、「真ん中より上」あるいは「上のほう」と認識している保護者が合わせて32.0%である。一方、1割程度の保護者は「わからない」と回答している。

次に、塾や家庭など、学校外での平日の学習時間をみてみよう(図3-8-2)。「およそ30分」という回答がもっとも多く44.0%で、次いで「1時間」という回答が30.2%となっている。「2時間」以上の長時間学習をしているという回答は7.6%であった。また、平均時間を算出したところ52分であった。さらに、学年別でみたところ、学年があがるにつれて学習時間は増加する傾向にあり、1年生だと平均時間は40分だが、5・6年生になると60分を超えている(図3-8-3)。

さらに、成績と学習時間との関連をみると、どの学年でも成績上位層の方が中位層や下位層よりも学習時間が長い(図3-8-4)。特に高学年(5・6年生)になると、学習時間の差は顕著に広がっていくようだ。